

四旬節第一主日

ルカ 4・1-13

2012. 2. 17 高円寺教会 7 : 30 ミサ

鈴木 康由 (鹿児島教区)

四旬節の第一主日となりましたが、この日に今日の三つの朗読箇所を通じて神を信じて生きるとはどういうことか、また、回心とはどういうことか、ということ問い直してみたいと思います。

まず、第一朗読では；

イスラエルの民の先祖は滅びゆく一アラム人であり、それゆえに生きるために安住の地をもとめエジプトに下ったものの、そこでは虐げと苦しみ、そして重労働に喘ぐことになってしまった。しかし、神の大いなる力により、エジプトからこの乳と蜜が流れる土地に導かれたからこそ、毎年この地での初物を神に供え、主である神の前にひれ伏しなさい。

という神に対する感謝と賛美が短い句の中で示されています。

一般的にユダヤ人の神に対する感謝と賛美とは、過去の出来事、現在のこと、そして未来に向けてなされるもの、と言われているようですが、確かに、それはそれで間違いではありません。しかし、私たち日本人が見落としがちなユダヤ人の信仰理解がその根底にあることに留意されなければなりません。面白いことに旧約聖書が書かれたヘブライ語には日本語の「過去」と「未来」とに一致する言葉はありません。「過去」に相当する言葉は“目の前”という意味の言葉が使われ、「未来」は“背後”という意味の言葉が使われます。この言葉が表象することは何か…。それは、神を信じる者の歩みは後ろ向きである、ということです。つまり、ユダヤ人たちにとって、目の前にある今まで注がれた神からの恵みに感謝しながら、背中を神に預けて生きることこそ神を信じる者の歩みなのです。

イスラエルの民の歴史はその始めから戦いを強いられてきました。なぜなら、彼らは半遊牧民族であったからです。彼らは乾季になると家畜の群れを養うために、肥沃な土地を求め彷徨わなければなりません。当然のことながらそのような土地には同じような未定着集団、もしくは先住民族がいるわけですから、土地やオアシスを巡っての争いは避けられませんでした。この争いを避け、生きる道として選んだのがエジプトでの生活だったのです。彼らはその地でどんな状況に置かれても常に今まで与えられた神様からの恵みを思い、この

恵みの与え主である神に信頼し続けたのです。ここにこそイスラエルの民・ユダヤ人の信仰告白の根源があります。こうした彼らの信仰理解を前提してパウロはテサロニケへの手紙の中で「いつも喜んでいなさい。絶えず祈りなさい。どんなことにも感謝しなさい。これこそ、キリスト・イエスにおいて、神があなたがたに望んでおられることです」という言葉が出てくるのです（Iテサ5・16-18）。因みに、鹿児島教区の郡山司教様の紋章には「それでも、喜び、希望、感謝」という三つの言葉が日本語で記されています。ここには旧約から新約に至る神を信じる者の生き方…どんなことがあっても…“それでも”という言葉に集約されるように、神様に信頼して後ろ向きで神様に向かってイエス様と共に歩むという信仰者の歩みが実によく表現されているように思えます。

次に、第二朗読では「救われる」という言葉が三度使われていました（10・9, 10, 13）。イエスが主キリストであり、その死と復活を信じるのなら、また、主の名を呼び求めることによって救われるとは一体どういうことなのでしょう。もちろん、イエス様を信じることによって奇跡的なことが起こり、今の窮地から救われる、ということではありません。ここで「救う」と訳された言葉ですが、原語には“直す”という意味もあります。つまり、神様との関係が今一度直される…正しくされる、ということの意味するのです。日々の生活にあってイエス様の御言葉通りに生きることはなかなか難しいものです。往々にして福音から離れ、ともすればその“離れてしまっている”という現実を知りながらも敢えて自分に向き合わなかったりするものです。私たちは弱い人間です。その弱い人間が後ろ向きで神様に向かって歩みを進めているのです。神様をはっきりと見定めて生きていくわけではないのですから、神様の御心から逸れてしまうことは当然のことかもしれません。しかし、だからと言って、憐れみ深い神様はこの「当然」のことを人間の弱さとして受け入れてくれるわけではありません。なぜなら、旧約の時代とは異なり、後ろ向きでも歩けるように神様は同伴者としてイエス様をお遣わしになってくださったからです。

四旬節に入った今、「回心」というよく言葉が使われます。漢字では“改める”＋“心”とは書かずに“回る”＋“心”と書きます。弱い人間は心を改造…造りかえることはできません。だからこそ、視線をイエス様に向き変える、ということで“心を回す”という漢字が使われるのです。回心は英語で **conversion** という言葉を使います。この言葉はラテン語の **conversio** という言葉に由来します。この言葉は、「共に・一緒に・全体で」という意味を持つ接頭語《con》＋「向きを変える」という動詞に基づく《versio》＝「心の向きを変えること」、即ち、「回心」を意味します。ここから分かるように「回心」は自分ひとりのことだけではなく、キリストを信じるものが皆一緒に“視線をイエス様に向け直

す”ことが求められるのです。残念ながら現代では「信仰は自分と神様やイエス様との個人的な関係だから教会に行かなくてもいい。」とか、「ミサに行かなくても心で神様やイエス様を信じていることが信仰生活だ。」という考えから、教会から離れてしまっている方々が非常に多いようです。あたかも偏狭なプロテスタンティズムと現代の個人主義的な考え方が交じり合った信仰理解がカトリック教会に浸透してしまっているかのようです。実に、すべての秘跡を通じて教会に於いて私たちはキリストの体として一つなのです。神様の望みはキリストの教会を通じて、すべての人が救われること、即ち、心をイエス様に向き変えることによって、一人ひとりが神様との関係を直すことにあるのです。

最後に福音についてですが、とても有名な「誘惑を受ける」という箇所が朗読されました。これを読む際に注意しなければならない点は、冒頭の「“霊”によって引き回され」という言葉です(4・1)。この日本語訳から、悪霊があたかもイエス様の髪の毛や胸ぐらを掴んでズルズルと荒れ野の中を引きずり回した、というイメージを持たれる方が少なからずおられるかと思えます。しかし、原語からすると、聖霊とも訳される“霊”によってイエス様が荒れ野に導かれた・連れて行かれた、というのが正確な訳です。つまり、イエス様には悪魔による誘惑を受ける必要があったのです。それも40日という神が与える試練を意味する日数の間…(4・2)。しかし、本当の誘惑はその40日が終わり、「空腹を覚えられた」ときからでした(4・2)。40日の間にどんな誘惑に晒されたかははっきりと記載されていませんが、この悪魔からの「本当の誘惑」については明確に記載されています。それは福音記者ルカが私たちに訴えたかった内容だからでしょう。では、イエス様が受けられた誘惑とは何か。まず、食欲、次に、支配権・権力、最後に、神から守られていることを確信することです(4:3-13)。おそらくこれらはイエス様の時代に人々が最も渴望したものではないでしょうか。現代ならさしずめ、お金、社会的地位・権力、時間といったところでしょう。とにかく、悪魔が何をもってイエス様を誘惑しようとしたかという、人間の根底にある欲望をかきたてることによって、福音を告げ知らせる、というイエス様に委ねられた使命・本来の生き方を妨げようとしたのです。現代にも通じるこの悪魔の誘惑により引き起こされる罪について、聖アウグスティヌスは重要なことを教えてくれています。彼は、

人間がもつ有限なものへの執着がこの世的なものごとへの捕らわれや執着となり、それにより罪に至る。反対に、永遠なものへの憧れが神を思い、その恵みの中で生きようとすることになり、それにより愛に至る(『自由意

志』よりの要約)。

と書き記しています。

とはいうものの、この世に於ける誘惑は巧みに忍び寄ってきます。ときにはその甘美な誘惑に酔いしれてしまうこともあるかもしれません。また、よいことだと思えていることが、実は悪魔からの誘いであることもあるかもしれません。こうしたことから日常を生きる私たちは永遠である神からの恵みの中で生きようとするのは難しいものです。しかし、思い出してください。洗礼によってイエス様に結ばれた私たちは決して一人ではありません。イエス様は荒れ野での誘惑を通じて、神の恵みの中で生き抜くことを私たち教会共同体に属する一人ひとりに教えてくださっているのです。

信仰者の歩みは後ろ向きで神様に向かうものです。それゆえに誰にとっても不安で覚束ない歩みです。しかし、神様は同伴者であるイエス様を私たちに与えてくださったのです。私たちはどんなときも決して一人ぼっちではありません。常にイエス様が共におられます。また、教会共同体として同じものを信じ、同じ悩みを抱えながらも信仰に生きようとする兄弟姉妹がおります。私たちは日常の煩わしさ、生き辛さ、そして様々な誘惑にあつて神様の恵みの中に生きていることを忘れがちです。しかし、それ自体が罪ではありません。それは私たち人間の弱さです。だからこそ、今、この四旬節の時期に主キリストを信じる者が一緒に視線…心の向きをイエス様へと変えてみましょう。聖書が語る「救い」とは神様やイエス様との関係を「直す」ことでもあるのです。